
恋姫無双 ～其は破戒するもの～

刃逆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双 ～其は破戒するもの～

【Nコード】

N7395H

【作者名】

刃逆

【あらすじ】

恋姫無双の世界でオリジナル主人公が暴れます。オリジナル系が嫌な人は見ない方が無難です。

小説説明（前書き）

この小説には残酷な描写が含まれます。

小説説明

恋姫無双の二次小説です。男のオリジナル主人公が色々します。

名前 鎖倉 吹雪

歳 17歳

備考

聖フランチェスカ学園二年生。身体能力及び頭の回転率が高い。親しい者には沸点が高いが、親しくない者にはとてつもなく低い。

プロローグ

雪がしんと降る中、彼——鎖倉吹雪は真っ白な絨毯の上を、ゆっくりと踏み締めながら歩いていった。

「寒い…」

コートを羽織り、マフラーを巻き寒さ対策は万全のつもりだったがまだ寒い。バイト帰りの坂道、何時もなら早足で上がって行くが、いかんせん分が悪い。

「何でこんなに降ってんだよ。つか、積もり過ぎだ」

大自然に文句を言う。実にならない事だが、言わなきゃやってられない。

「ただいま」

返事のない日常をスルーし、自分の部屋へ。下では門下生が鍛練をしている声が聞こえてくる。

「全く、良くやるよなあ」

感心の言葉を上げ、ベッドにて瞼を閉じる。すぐ様意識に暗幕が落ち、夢の世界へ旅立って行った。

「この子は……よ!」

違う…。

「ひい！く、来るな、……！」

違う……。

「この子は……ましよう」

辞めろ！

「うわあああっ！」

汗をかきながら飛び起きる。最近見なくなった悪夢。忘れる事で形を潜めていたが、まさか今日見るとは。

「折角忘れてたってのに…」

頭を軽く降って、周囲を眺めた。相変わらず暗いのだが、何故だろう。誰か、居る。

「誰だ？」

けだるい頭を叩き起こし警戒しながら問う。いつの間にか月が出ていた。そこに映し出されたのは、

「うつふううつん」

化け物だった。

「はあ？」

あまりの出来事に理解力が付いて行かない。それとは裏腹に、巨漢の化け物は素早かった。

「外史へごあんなあい！」

いやいや。いやいやいや。せめて分かるように説明しろや、木瓜ええええ！

そんな心の叫びを無視し、光は俺を包み込んで行ったのだった。

第一話

朝の光に瞼を刺激され目を開ければ、其処には荒れ果てた大地があった。高い山が連なり、それでいて何処までも見渡せる地平線。地平線が見えると言うことは、此処は日本じゃない。

「成る程、夢か」

取り敢えず確認の為に頬を抓った。

「痛っ……夢じゃ、ないのか？」

夢なら痛くないのだからこれは現実だと、頬の痛みが囁く。

「しかし、何でこんな事に……」

昨日を振り返ってみる。朝から夕方まで学園、終わってからバイト、帰って寝た以上……じゃない！

「ちょっと待て。確か、化け物が居たような……」

巨漢の女言葉の妖怪が確かに居た。ソレが言った言葉に違和感を覚えた。『外史』だったか。

正史とは全く違う、二次創作みたいな物だったはず。それに『ご案内』と言ったよな、あのキチガイ。

「まあ、待てよ、鎖倉吹雪。まだ誰とも話してないのに、何が分かるって言うんだ」

脳裏に浮かんだ想像を打ち払う。馬鹿馬鹿しい。平行世界に飛ぶなんて、そんな事有り得ない。

「まずは、人もしくは街を探すか…」

「よう、兄ちゃん。良い服着てるじゃねえか」

「は？」

独り言以外の言葉に驚きつつ後ろを向くと、男が三人立っていた。しかし、部屋着を良い服と言われるとは、と、ざっと自分の服装を見てみれば、何と学生服を着ているではないか。

「何だよ」

「おい兄ちゃん、話聞いてんのか？」

「五月蠅い、少し静かにしろ」

確かに部屋着だった筈だ。学生服で寝るなんて有り得ない。それにこの三人…

「今時ペアルックかよ」

「ペあるつく？何だ、それ」

「とにかく、その服渡すんだな」

「そーだそーだ」

どうやら自分は追い剥ぎにあってるらしい。こんな時代に――
――いや、認めよう。ここは現代じゃない、と。どういう因果か知らないが、過去に来たらしい。

切れ味の悪そうな剣は半ば鈍器じみている。黄色の布を巻き、追い剥ぎという行為。

「三国志の世界って訳か…冗談が過ぎるぞ」

「何ぶつぶつ言ってやがっ！」

「ったく、誰に口聞いてやがる」

水月を的確に殴り卒倒させ、他の二人を見る。先程まで余裕の表情だったのに、もう顔色が悪い。喧嘩の基本――頭を潰す。

「で？」

「ひ、ひいいいい！」

逃げる早さは天下一品だな、おい。

溜息を吐き、今度こそと一歩踏み出せば前方から砂塵が舞っている。

「おいおいおいおい。また、厄介事か？」

好い加減にしろよ？と心の中で叫び、其処で立ち止まるのだった。

周囲を囲むは騎馬の群れ。俺を中心に円となり、こちらを警戒している。

旗には『曹』の文字。この時代で曹か…当たりかねえ。

天に祈りつつ、人の垣根を分けて現れたのは三人の女性。

「華琳様！こやつは……」

「どうやら違うようね。連中はもっと年かさの中年と聞いたわ」

「ではこの男は何者でしょう？」

ふむ、どうやら華琳と呼ばれた金髪少女が頭だ。黒髪オールバックと水色の髪は守護する者。将ってやつか。

「ふむ。貴方、名前は？」

「聞く前に名乗ったらどうだ？」

「貴様っ、華琳様に向かってその口の利き方はなんだ！」

知らねえよ、んな事。

「黙れよ。で？」

「やめなさい、春蘭。その男の言うことも尤もよ。我が名は曹操。陳留で刺史をしている者よ」

……目の前の少女が曹操らしい。嘘を言っているとは思えない、至極真面目な顔だ。ならば真実、乱世の奸雄・曹孟徳なのだろう。その身から出る威圧感は、半端ではなかった。

「俺は鎖倉吹雪。字は無い」

「字が無い？　どう言う事かしら？」

「どうやら、俺は違う世界から来たらしくてね。自分でも信じられないが」

突拍子がなさすぎる。平行世界でも十二分に有り得ないのに、時代を遡っているのだから。

俺の一番好きな君主が女になって目の前に居るなんて、ビックリだ。

「違う世界？　……中々興味深いわね」

「興味を持つような良い世界じゃないけどな」

「まあ、今は良いわ。それより、吹雪。貴方、見たかしら」

「中年男三人組なら見た。殴ったら逃げて行ったよ」

それを聞き、曹操は更に二、三回質問してきた。外見はどうだったか、何か本の様な物は持っていなかったか等。

それに答えると、曹操は直ぐに兵を辺りの探索に向かわせた。

「さて、春蘭。吹雪を連行しなさい」

「はっ！」

「おいおい、刺史殿の手を煩わせる様な事したか？」

「十分以上に怪しいのよ、貴方は。春蘭」

「ぐずぐずするな、鎖倉吹雪！」

そのままズルズルと引っ張られ、街へと向かう。街に行きたいとは思ってたけど。こんな形で行く事になるとは…。大きく溜息を吐き、今後に思いを馳せるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7395h/>

恋姫無双 ～其は破戒するもの～

2010年10月10日13時45分発行